

「生命、それは創造である」

千利休の教えを西田幾多郎の「場所の論理」から日本文化論に位置付ける研究

松本きみゑ (大阪大学)

「生命、それは創造である」

西田は徹底の実証主義の立場から、生理学者であるホールデー(1860-1936)の著書『生物学の哲学的基礎』の生命の概念に同意するという。ホールデーは有機体と環境との相互整合的に、形が形自身を維持する所に我々の生命があるという。

西田は絶対矛盾的自己同一の「場所」を確立する。この立場は「西洋近代を超越する東洋の論理」である。絶対矛盾的自己同一とは絶対無の自覚的限定の最も具体的な段階が歴史的世界と考えられるものであり、創造的世界の創造的要素といえることができる。

茶書の原点となる、『山上宗二記』は利休の絶頂期に弟子の山上宗二(1544~1590)が著述した茶道秘伝書であり、この茶書には人間形成の道に通ずる、草庵茶道の理論が完成したことが記されている。茶道は、型の教育である。「型とは、伝統の客観化された集積である」。筆者は茶道(侘茶)の精神を身につけるために「型」・「行」・「心」の三つの視点を設定し、考察した結果、『山上宗二記』において、「茶湯には習骨法晋法度。第一」を基本とし「僧の行いを専らにす」、「是に心を懸くれば、悉く下手の名を取るべし。」と『論語』においては、「礼」、「本を務む。本立ちて道生ず」、「其れ仁の本為る」とある。茶道には「型」・「行」・「心」の三つの観点が必要不可欠であることが明らかである。

久松真一は『茶道の哲学』で『山上宗二記』にも出ている「侘数寄」の真意を考察し、様々の文化を包括する茶道を創造し形成する生きた主体であると解明し、これを絶対無的主体、主体的無、創造的無と名づけている。

筆者は情や意を本とする「無」の思想から千利休の「型」を西田幾多郎の「形なきもの」の形を見、声なきもの声を聞く」という「形」のない文化から哲学的、学問的に解明できるとヒントをえた。そこで発表では「生命、それは創造である」どのようにして可能になるのか。『山上宗二記』の説く稽古論と西田哲学から明らかにする。